

2020年度春学期 統計学 第5回
分布をまとめる — 平均・分散

浅野 晃
関西大学総合情報学部



「※」がついている項目は、
通常の講義ではスライドに書かず、
口頭で話す部分だと思ってください。

代表値 🤔

代表値とは

統計学が相手にするのは、
「分布」しているデータ

※みんなが空の試験、国民全員が「統一〇〇党」に
入れる選挙は、統計学の対象ではありません

「大般若会」で
経典を翻すだけで「読む」ように、
データも一目見るだけで内容がわ
かればいけれど…

※大般若会(だいはんにやえ)とは、
600巻に及ぶ「大般若経」を、僧侶が翻
すことで「読む」という儀式です。
(講義ウェブサイトにあるリンク先を
参照してください)

代表値とは

現実には、人間は、数字をざっと眺めるだけで一瞬で理解できるほど、賢くありません
そこで

※前回の講義でやったのは • 図示する(ヒストグラム)

※今回扱うのは • ひとつの数にまとめる

↓
それが

[代表値]

その利点は
数字で表されていれば、
計算ができる

平均

とくに[算術平均]は
代表的な代表値

※まあご存じだとは思いますが

算術平均

$$= (\text{データの総和}) \div (\text{数値の個数})$$

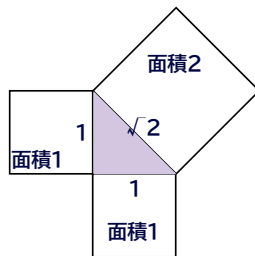
↑
” / ”でも同じ意味
(÷よりもよく用います)

算術？

算術平均以外にも、
「幾何平均」「調和平均」というものもあります
※習いましたか？

算術平均 = (データの総和) ÷ (数値の個数)

幾何平均 = (データ全部の積)の、(数値の個数)乗根



√(ルート, 2乗根)が出てくるのは
幾何の問題です

この講義では、以後「平均」といえば算術平均のことです。

算術平均を式で書くと

※1, 2, …は添字(そえじ)といいます。
「1番目の数値, 2番目の数値, …」という意味

データ x_1, x_2, \dots, x_n

のとき,

数値の個数
(データサイズ) n

※「エクスペー」と読んでください。「バー」は平均を表すのによく用います。

$$\text{平均 } \bar{x} = \frac{x_1 + x_2 + \dots + x_n}{n} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i$$

※Σは「合計」を表す記号です。

※もし日本人がΣ記号を発明していたら、きっと「和」と書いていたことでしょう。

データサイズ？

「データ」という言葉は、
数値の**集まり**をさす
(1つ1つの数値をさすのではない)

データの中に含まれる数値の個数を
データの**大きさ(サイズ)**という

※データの数とはいいません。

家族(family)という言葉に似ている
※人数の多い家族は「大家族」といい、「多家族」とはいいません。

度数分布から平均を求める

度数分布とは、こんなやつでした

以上	未満	階級値	度数	相対度数
15	25	20	4	0.08 (8%)
25	35	30	3	0.06 (6%)
35	45	40	3	0.06 (6%)
45	55	50	8	0.16 (16%)
55	65	60	12	0.24 (24%)
65	75	70	8	0.16 (16%)
75	85	80	9	0.18 (18%)
85	95	90	3	0.06 (6%)
x	x	x	計 50	計 1 (100%)

※前回の講義に
出てきたものです。

度数分布から平均を求める

平均=(データの合計)/(データサイズ)

ひとつの階級に入っている数値は、みな「階級値と同じ」とみなすから、
ひとつの階級には、「階級値」と同じ数値が、度数(個)あるとみなされる
よって、ひとつの階級の数値の合計は、「階級値×度数」で表される

=((階級値×度数)の合計)/(データサイズ)

以上	未満	階級値	度数	相対度数
15	25	20	4	0.08 (8%)
25	35	30	3	0.06 (6%)
35	45	40	3	0.06 (6%)
45	55	50	8	0.16 (16%)
55	65	60	12	0.24 (24%)
65	75	70	8	0.16 (16%)
75	85	80	9	0.18 (18%)
85	95	90	3	0.06 (6%)
x	x	x	計 50	計 1 (100%)

度数分布から平均を求める

平均=(データの合計)/(データサイズ)
=((階級値×度数)の合計)/(データサイズ)

かけ算(×)と割り算(/)について、
カッコ“() ”の位置をかえる

= [階級値 × (度数 / データサイズ)] の合計

以上	未満	階級値	度数	相対度数
15	25	20	4	0.08 (8%)
25	35	30	3	0.06 (6%)
35	45	40	3	0.06 (6%)
45	55	50	8	0.16 (16%)
55	65	60	12	0.24 (24%)
65	75	70	8	0.16 (16%)
75	85	80	9	0.18 (18%)
85	95	90	3	0.06 (6%)
x	x	x	計 50	計 1 (100%)

度数分布から平均を求める

$$\begin{aligned} \text{平均} &= (\text{データの合計}) / (\text{データサイズ}) \\ &= [\text{階級値} \times (\text{度数} / \text{データサイズ})] \text{の合計} \end{aligned}$$

(度数 / データサイズ)のことを
「相対度数」という

$$= [\text{階級値} \times \text{相対度数}] \text{の合計}$$

以上	未満	階級値	度数	相対度数
15	25	20	4	0.08 (8%)
25	35	30	3	0.06 (6%)
35	45	40	3	0.06 (6%)
45	55	50	8	0.16 (16%)
55	65	60	12	0.24 (24%)
65	75	70	8	0.16 (16%)
75	85	80	9	0.18 (18%)
85	95	90	3	0.06 (6%)
x	x	x	計 50	計 1 (100%)

※この計算, 私は小学校のときに
「平均をかたんに計算する方法」
として習ったような気がします。

度数分布から平均を求める

テキストに載っている別の例で, 計算してみましょう

階級	階級値	相対度数
0 ~ 9 (点)	5	0.04
10 ~ 19	15	0.16
20 ~ 29	25	0.08
30 ~ 39	35	0.12
40 ~ 49	45	0.10
50 ~ 59	55	0.10
60 ~ 69	65	0.12
70 ~ 79	75	0.08
80 ~ 89	85	0.18
90 ~ 100	95	0.02
合計		1.0

※相対度数がわかれば,
もう度数は必要ないので,
載せていません。

度数分布から平均を求める

各階級で, [階級値 × 相対度数] を求めて, 合計する

階級	階級値	相対度数	階級値 × 相対度数
0 ~ 9 (点)	5	0.04	$5 \times 0.04 = 0.2$
10 ~ 19	15	0.16	$15 \times 0.16 = 2.4$
20 ~ 29	25	0.08	$25 \times 0.08 = 2.0$
30 ~ 39	35	0.12	$35 \times 0.12 = 4.2$
40 ~ 49	45	0.10	$45 \times 0.10 = 4.5$
50 ~ 59	55	0.10	$55 \times 0.10 = 5.5$
60 ~ 69	65	0.12	$65 \times 0.12 = 7.8$
70 ~ 79	75	0.08	$75 \times 0.08 = 6.0$
80 ~ 89	85	0.18	$85 \times 0.18 = 15.3$
90 ~ 100	95	0.02	$95 \times 0.02 = 1.9$
合計		1.0	合計 49.8

これが
平均

分散と標準偏差 🤔

「ばらつき」を数字で

分布は、
大小ばらばらな数値からなるデータ
では、どのくらいばらばらかを、
数字で表そう

A, B, Cは、いずれも10個の数値からなるデータです。

A: 0, 3, 3, 5, 5, 5, 5, 7, 7, 10

B: 0, 1, 2, 3, 5, 5, 7, 8, 9, 10

C: 3, 4, 4, 5, 5, 5, 5, 6, 6, 7

平均は
どれも5

では、
どう違う？

レンジとばらつき

A: 0, 3, 3, 5, 5, 5, 7, 7, 10

B: 0, 1, 2, 3, 5, 5, 7, 8, 9, 10

C: 3, 4, 4, 5, 5, 5, 5, 6, 6, 7

Cは、最大と最小の差[レンジ]が違う

A, Bはレンジは同じだが、

Aの青線部とBの赤線部を比べると
Bのほうがばらついているように見える

偏差

※AとBのばらつきの違いを表すために、偏差という考えを用います。

各数値と平均との差を[偏差]という

※AもBも平均は5ですから、各数値と5との差を書いていきます。

-5 -2 -2 0 0 0 0 +2+2 +5

A: 0, 3, 3, 5, 5, 5, 5, 7, 7, 10

B: 0, 1, 2, 3, 5, 5, 7, 8, 9, 10

-5 -4 -3 -2 0 0 +2+3+4 +5

偏差を平均したら、AとBのばらつきの違いが表せるでしょうか？

偏差の平均？

だめです。偏差を平均したらゼロになるからです。

-5 -2 -2 0 0 0 0 +2+2 +5

A: 0, 3, 3, 5, 5, 5, 5, 7, 7, 10

B: 0, 1, 2, 3, 5, 5, 7, 8, 9, 10

-5 -4 -3 -2 0 0 +2+3+4 +5

そこで、偏差を2乗する

偏差を2乗したら、全部正の数になるから、2乗してから平均する

※斜体の数字は、偏差を2乗したものです。

25 4 4 0 0 0 0 4 4 25
 -5 -2 -2 0 0 0 0 +2+2+5
 A: 0, 3, 3, 5, 5, 5, 5, 7, 7, 10
 B: 0, 1, 2, 3, 5, 5, 7, 8, 9, 10
 -5 -4 -3 -2 0 0 +2+3+4+5
 25 16 9 4 0 0 4 9 16 25

分散

[分散] = (偏差)²の平均

この「分散」を、ばらつきの指標とする

平均 6.6

25 4 4 0 0 0 0 4 4 25
 -5 -2 -2 0 0 0 0 +2+2+5
 A: 0, 3, 3, 5, 5, 5, 5, 7, 7, 10
 B: 0, 1, 2, 3, 5, 5, 7, 8, 9, 10
 -5 -4 -3 -2 0 0 +2+3+4+5
 25 16 9 4 0 0 4 9 16 25

平均 10.8

Bのほうが分散が大きい。Bのほうがよりばらついている。

分散と標準偏差

[分散] = (偏差)²の平均 式で書くと

1番の数値 データの平均

$$\sigma^2 = \frac{1}{n} \{ (x_1 - \bar{x})^2 + (x_2 - \bar{x})^2 + \dots + (x_n - \bar{x})^2 \}$$

シグマ2乗と読む

$$= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2$$

n 個たして n で割る

分散の平方根(√)を[標準偏差]という

分散を求める計算の途中で数値を2乗しているので、平方根を求めてもとにもどす

度数分布から分散を求める

※さきほど説明した通りです。

データの平均 = [(階級値) × 相対度数]の合計
 ※ここが違います ※同じです
 一方、分散 = (偏差)²の平均 ※ここを置き換えます

だから、分散 = [(偏差)² × 相対度数]の合計

分散 = [(階級値 - データの平均)² × 相対度数]の合計

以上	未満	階級値	度数	相対度数
15	25	20	4	0.08 (8%)
25	35	30	3	0.06 (6%)
35	45	40	3	0.06 (6%)
45	55	50	8	0.16 (16%)
55	65	60	12	0.24 (24%)
65	75	70	8	0.16 (16%)
75	85	80	9	0.18 (18%)
85	95	90	3	0.06 (6%)
x	x	x	計	計
			50	1 (100%)

度数分布から分散を求める

テキストに載っている例で、計算してみましょう

階級	階級値	相対度数	階級値×相対度数	偏差	(偏差) ²	(偏差) ² ×相対度数
0～9 (点)	5	0.04	0.2	$5 - 49.8 = -44.8$	$(-44.8)^2 = 2007.4$	$2007.4 \times 0.04 = 80.28$
10～19	15	0.16	2.4			
20～29	25	0.08	2.0			
30～39	35	0.12	4.2			
40～49	45	0.10	4.5			
50～59	55	0.10	5.5			
60～69	65	0.12	7.8			
70～79	75	0.08	6.0			
80～89	85	0.18	15.3			
90～100	95	0.02	1.9			
合計		1.0	49.8 (=平均)			

度数分布から分散を求める

テキストに載っている例で、計算してみましょう

階級	階級値	相対度数	階級値×相対度数	偏差	(偏差) ²	(偏差) ² ×相対度数
0～9 (点)	5	0.04	$5 \times 0.04 = 0.2$	$5 - 49.8 = -44.8$	$(-44.8)^2 = 2007.4$	$2007.4 \times 0.04 = 80.28$
10～19	15	0.16	2.4	-34.8	1211.04	193.77
20～29	25	0.08	2.0	-24.8	615.04	49.20
30～39	35	0.12	4.2	-14.8	219.04	26.28
40～49	45	0.10	4.5	-4.8	23.04	2.304
50～59	55	0.10	5.5	5.2	27.04	2.704
60～69	65	0.12	7.8	15.2	231.04	27.72
70～79	75	0.08	6.0	25.2	635.04	50.80
80～89	85	0.18	15.3	35.2	1239.04	223.03
90～100	95	0.02	1.9	45.2	2043.04	40.86
合計		1.0	49.8 (=平均)			696.96 (=分散) $\sqrt{696.96} = 26.4$ (=標準偏差)

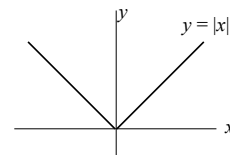
分散
分散の平方根が標準偏差

ところで、どうして2乗するの？

偏差の「マイナス」を「プラス」にしたいのなら、

偏差の2乗ではなく、
偏差の「絶対値」ではいけないの？

絶対値の関数は、途中に折れ目があってむずかしい



※「不等式 $|2x + 3| < 4$ を解け」という数学の問題、
絶対値記号の中がプラスのときとマイナスのときで
場合分けしなければいけないので、面倒だったでしょう？

2乗を表す関数のグラフ
(放物線)には折れ目はない ですから2乗を
用います。

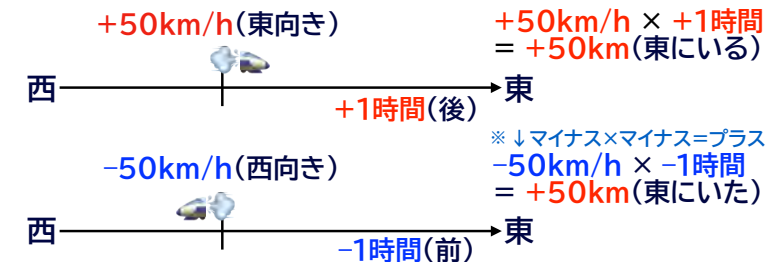
なぜマイナスかけるマイナス＝プラス？

※ マイナス×マイナスは、「超マイナス」にならないの？

プラスとマイナスは、「向きが反対」と考えましょう

東に1km進むのが「+1km」なら 🐢
🐢 西に1km進むのは「-1km」

1時間後が「+1時間」なら
1時間前は「-1時間」



標準得点 🤔

「試験で70点」は優れているのか

試験で70点をとった。
まわりより優れているのか？

一緒に受けた人たちの平均点が

50点なら 優れている

80点なら 劣っている

「試験で70点」は優れているのか

試験で70点をとった。
まわりより**とても**優れているのか？

一緒に受けた人たちの平均点が

~~50点なら まあ優れている~~

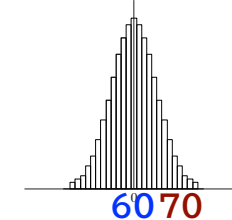
~~30点なら とても優れている ...?~~

分散も考えないと、答えられない

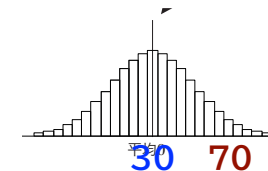
「試験で70点」は優れているのか

一緒に試験を受けた人たちが

平均60点で
標準偏差5点



平均30点で
標準偏差20点



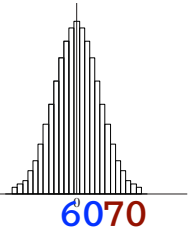
70点の「地位」、つまり受験者の中で
どのくらい優れているかは、どちらも同じ

「地位」を数字で表す

一緒に試験を受けた人たちが

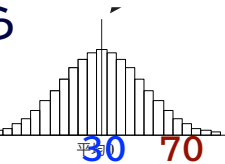
平均60点で標準偏差5点なら

70点の人は、平均を
標準偏差の2倍上回っている



平均30点で標準偏差20点なら

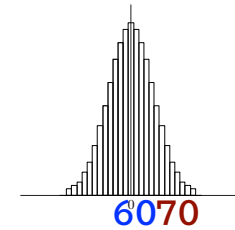
70点の人は、やはり平均を
標準偏差の2倍上回っている



だから、70点の「地位」は同じ

標準得点

平均を
標準偏差の2倍上回っている



これを
[標準得点]が2点
という

平均を標準偏差の2倍
下回っているなら

標準得点が-2点

標準得点への換算

標準得点 =

分布中のある数値が、
平均を標準偏差の何倍
上回って／下回っているか

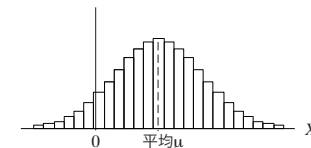
分布そのものを
平均0, 標準偏差1に「変換」したら？

その数値の変換後の値が、
そのまま標準得点になる

分布の変換

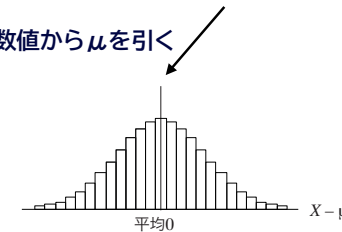
分布中の各数値から、平均を引く

平均 μ
標準偏差 σ



各数値から μ を引く

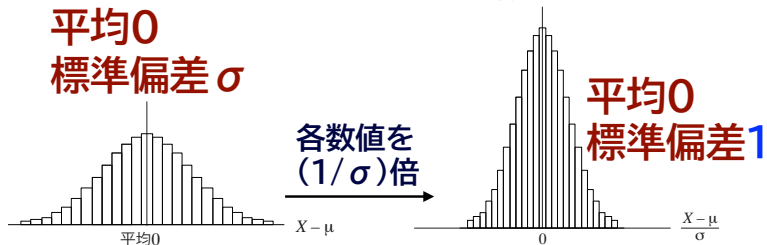
平均 0
標準偏差 σ



分布の変換(続き)

分布中の各数値から、平均を引いて
標準偏差で割る

各数値の偏差は $(1/\sigma)$ 倍
分散は(偏差)²の平均 $(1/\sigma)^2$ 倍
標準偏差は分散の平方根 $(1/\sigma)$ 倍



式で書くと

※分布そのものを、数のようにひとつの文字で表す

分布そのものを X とすると

$$Z = (X - \mu) / \sigma$$

と変換すると、 Z は平均0, 標準偏差1

受験産業でいう「偏差値」

平均0, 標準偏差1の分布 Z を、さらに

$$W = 10Z + 50$$

と変換すると、 W は平均50, 標準偏差10

これが[偏差値]

偏差値70 平均よりも、標準偏差の2倍
上回っている

偏差値40 平均よりも、標準偏差の1倍
下回っている

今回も、演習問題の回答は
前回と同じように提出してください。